

雜 錄

感情に關する一新學說

千 葉 胤 成

感情殊に其根本性質に關する理論的研究は、一
は其歴史的事情により、一は其研究法上の困難の
爲め、未だ價値ある結果を齎すに至つて居ない。
蓋し新しき心理學の研究は、先づ星學、生理學の
如き客觀的科學に於ける研究の暗示を受けて開始
せられ、學者皆主として所謂客觀的意識の問題に
没頭し、思を未だ主觀的意識の範圍に致すに遑が
なかつたのは、恰かもかの古代哲學が先づ世界の
本質等の問題に起り、近世に至り漸々主觀の研究
に向ふに至りしと其趣を同じくするものがある。

加之感情の如き所謂主觀的意識の研究は、客觀的
意識と其性質を異にし、吾人が之を觀察せんとす
るや、已にそは主觀性を失ふのみならず、之を實
驗場裡に現出せしむることは頗る困難のことに屬
する。以上の事由により感情に關する研究の範圍
は、豊富にして興味ある問題を有するに拘はらず
確實なる實驗的基礎を有する理論的研究は、殆ん
どないと云つても過言でない。思ふに感情の根本
性質に關する價値ある研究は、新しき研究法の上
に施行されたる精細なる内觀と周到なる實驗とを
基礎としたるものでなければならぬ。吾人は此の

如き研究に多大の興味を有し、之に關し多少の見解もないではないが、茲には唯ミュラー・フライエンプフェルス氏が「感情の概念及其分解」と題し千九百十四年の「五官の生理學及心理學雜誌」に掲載せる一論文の大意を傳ふるに留める。

凡そ近時の學界には、精神作用を發生學的、生物學的に研究せんとする傾向が盛になつて來て居るやうである。恐らく學者の腦裡には、生物學に於ける進化論的研究を精神現象に對しても適用せんとする願望努力があるのでなからうかと思はれる。斯の如き努力は、獨り一般精神の研究の範圍のみに止らず、藝術宗教等の研究の範圍にも之を認むることが出来る。此の如き研究のみによりて、精神現象殊に宗教藝術の如き現象を理解し得べきかは、大なる疑の存すること勿論であるが、一説として傾聽すべき價値は充分有して居るやうである。今ミュラー・フライエンプフェルス氏の感情

に關する見解は、明かに此傾向に屬すと見ることが出来る。而して斯の如き思想が、氏以前に存在しなかつたかは是亦疑はしいが、氏自身は全然新しき方法に立脚するものであると言明して居る。

其所説は一言にしていへば、凡の心的現象は未だ感覺とか感情とかに分化せざる統一的根本意識現象の變形又は分化であるといふにある。然るに此不明瞭なる意識は、未だ神經系統を形成するに至らざる劣等動物にも之を許さなければならぬが人間の場合にも、此分化せざる一般意識は飢渴等の際之を經驗することが出来る。茲に於て感覺感情の發展を考へ、是等已成の感覺感情の外、なほ未だ分化せざる一般意識を假定し、此三者は同一現象の特殊の形式なりとし、此の如くして一方には分化の方面、他方には一般化の方面の存することを見やうとするにある。かくて著者は次の如く云つて居る。『斯の如きことは、吾人をして生物

學に於ける爭論を想起せしむる。即ち生物學に於て原始的生體は動物か植物かにつき爭論されたが、未だ分化せざる原生生物の概念の成立するや、此論争は解決せられ、高等なる生物は只根元的、統一的な生活體の特殊化に過ぎざることとなつた。即ち之と同様の關係が、吾人の問題としての感情の場合にも存する』と。

二

著者は感情なるものが獨立の存在を有し、他の要素又は諸他の心的作用の屬性にあらざることを明かにせんがために、是等に對する關係を詳述して居るが、其大要は次の如くである。

先づ感覺及意志との關係を述べて次の如く云つて居る。『學者は感情の現象上の表徴をあげんとし、遂に之を狀態てふことに歸し、感情は自我の狀態なりとし、之を客觀的感覚内容より區別せんとした。然るに此主觀性の表徴なるものが、感覺

内容より區別さるゝ場合には適用されるが、例へば「凍へる」といふやうな經驗にありて、感覺と感情を區別することは非常に困難である』。更に又『感情と意志現象との區別に至りては一層困難である。蓋し感情の根柢には常に意志存し、簡單なる快の感情にも努力、向上等潛み、不快の感情には防禦、拒否等を含むものである。況んや情緒、忿怒、心配、愛に至りては明かに欲望を含むを認むることが出來る』。かくて感情と感覺、感情と意志動作との區別は單に現象上のことに過ぎず、本質的に之れを區別することはむづかしいとして居る。

更に氏は感情と諸他の心的作用との關係を述べて居るが、先づ知覺との關係については、次のやうなことを云つて居る。『學者或は感覺の情調といふことをいふが、實は知覺にして始めて情調を帯び得るものである。かの聯想心理學に於て、知覺

は感覺と聯想との和、即記憶心像であると云つて居るが、これは誤つて居る。即知覺に於ける感情と運動反應とは附隨現象にあらず、共に知覺をなす構素であり、余は之を特殊の態度であると考ふるのである。此際吾人は確かに不快の感情のみならず、他の感情即親密感情、信託感情等の存在するのを見る。併し是等は何れも主觀的反應で、即知覺に對し感情は附隨にあらず、其構素たることを明らかにするものである。従つて感情なき知覺は存在せざることとなる。尤も茲に「無關心」も亦一の態度であることを注意しなければならぬのは勿論である。即吾人に快も不快も喚起しない所のものを知覺すと假定するに、其際取もなほさず吾人は「無關心」或は「無頓着一の感情に導かれて居るのである。即そは中性色又は無色の感情と同じやうなものであるが、恰かも政黨生活に於て不偏中正も亦一の態度たると同じく、矢張一の態

度たることを失はぬ。斯の如き感情に屬するものに標型感情といふのがある。これは例へば「手」とか「人」とかいふ如き、或は「蛇」といふ如きものである。今余が途上青い渦卷形のものを見て蛇に對する態度をとる際、其瞬間之を蛇として知覺する。然るに此際起るのは、かの聯想心理學で考ふる如く、前の蛇の記憶心像にあらず、この感覺の複合をして知覺たらしむるものは、かの特殊の反應、態度である即感情である。即知覺は常に感情を其要素として包含すといふことが出来る。』

『知覺に對し行はるゝ關係は觀念に關しても同様に行はれる。何となれば觀念は聯想心理學の考ふる如く、感覺の再生ではなく、知覺の再生であるからである。余が蛇に氣が付いたときには、單に色の印象のみならず、先づ全體の標型としての態度を共に再生する。斯の如きことは日常生活には非常に多いことであるが、殊に再生の困難な場

合、例へば嗅覺の場合には觀念に重要なるは感覺よりも寧ろ感情であることがよくわかる。例へば薇薔の嗅を再生し得ずして、夫に應ずる感情即態度を再生し得るが如き是である。なほ又吾人の自己觀察に訴へても、觀念は感覺よりも感情に深い關係を有するもので、かの聯想心理學の考ふる如く、客觀的現象にもあらず、外部感覺の弱められたる再生にもあらず、觀念は全く主觀的現象である。即觀念は客觀的要素を包含し、或は包含し得る(之を缺くことを得)特殊の感情である。

『以上の如き關係は、觀念に對しても亦同様である、概念は一般觀念に基いて居るといふ聯想心理學者の考は誤つて居る。何となれば、バークレ一以來一般觀念なるものは存在せず、又簡單なる内觀によるも其存在は考へられぬからである。即概念なるものは聽運動的言語作用に結合する意味の意識で、内觀上では理解の感情、從つて動作の

準備として現はるゝ所のものである。斯の如く概念は特殊の感情として意識内に現はれる。其故に概念は觀念にもあらず感覺の改造にもあらず、精神生活の客觀的方面と見ることが出來ぬ。即そは客觀に或方向を有して居るけれども、亦一の主觀的現象に外ならぬ。即概念は特殊の感情を以て聽かれたる語により喚起さるゝ「活働の傾向」としての心的表現である。斯の如く概念の中には、本質的要素として感情を包含すとする上は、之を感情と對立せしむることは出來ぬことになる。茲に所謂感情は快不快に限られないことは勿論である。故に感覺と快不快の感情のみを要素なりとする心理學は、心的複合の全範圍及其多樣性を説明することが出來ぬといはなければならぬ。

『感情は之を外部感覺知覺と劃然區別が出來るとするも、更に衝動及意志に比するときは區別は困難になる。故に感情と意志とは之を「情的現象」

として「知的現象」に對立せしめ得ることがある。内部分解によりても感情と衝動とは極めて類似し若し之を區別せんとすれば、感情は「受動要素」衝動は「能動要素」とすることが出来るが、併しこは比較的事で、凡の感情の根柢には活動要素即意志を含むものである。即快の感情には常に固執、催進に向ふ傾向あり不快の感情には拒否、回避の傾向がある。快不快の感情は明かに衝動から出て居るのであるが、通例そは意識されない丈のことである。兎も角快不快の感情と衝動とは何等區別すべき特徴がないと云ひ得る。

『簡單なる快不快の感情と情意活動或は情緒とを區別することは困難である。通例吾人は情緒は觀念と簡單感情との結合であると云つて居るが、忿怒又は性愛の如き情緒は、快不快丈では説明がつかない。即是等の情緒にありて其核心たるものは、衝動即動的作用を含む意志傾向である。され

ば情緒の本質は觀念であるといふやうな見解は避けなければならぬ。觀念は情緒の解發者とはなるが、其原因ではない。即情緒の本質は「主觀的」で「客觀的」ではない。如何なる觀念も主觀的傾向がなければ情緒を解發することが出来ぬ。恰度彈藥があつても焰がなければ燃えざると一般だ。

『運動要素との關係に就ては、先づ吾人の問ふべきことは、吾人が意志動作を起す前に、吾人の精神内に何が現はれるかといふことである。チーヘンによれば意識的或は有意的運動の際、即自働的反射的ならざる運動の場合、例へば故意に前にある事物の刺戟から右の手が捕捉運動を起す場合に精神内に現はるゝは次の如きものである。第一には前已に屢々行はれたる捕捉運動の記憶心像でこは運動觀念とも稱せられて居る。第二には運動が行はれたることを告知する所の感覺である。果して實際さうであらうか。前の捕捉運動の記憶心

像がしかく實際明かであるか。余にはさうでないやうに見える。例へば余がペンをインキの中に浸すとき余の意識内には決して記憶心像は存しない

此事はなほ他の意志運動の場合をあげれば一層明かになる。そは言語又は言語思考といつた方がよいと思ふが、此言語の場合である。吾人が或句を云ふときに、實際運動の記憶心像が先立つか何うか。そう云ふものゝないことは、如何なる運動が言語の際行はれたるかを云ひ得るのでわかる。其故にこれは運動觀念で説明は出來ず、先行するものは記憶心像よりは寧ろ感情と云つた方がよいリップスは之を「堰かれたる努力」と名けた。斯の如く見れば吾人はリップスと共に意志動作に、先つ意識經驗は之を努力感情と見ることが出来る。即リップスによればそは精神的傾向で余の所謂態度である。即そは特別の根本要素ではなく、禁止さるゝときに感情及努力の性質が最も明かに

なつて來るのである。

『更に又思考及想像生活が、客觀的再生から來ると考へるのも誤である。即是等は自我の反應で其中に感情が大に働いて居るものである。數學の問題をとくときでも、疑惑、論證及他の感情が主として働くものである。尤も茲に思考の内容としてではなく、寧ろ動機禁止として這入込むのであるが、更に他の思考作業例へば詩人の仕事などになれば、感情は内容として大なる役目を演ずることになる。思考の理論については、從來記憶心像の結合であるといふ見解に支配せられて居つたが、元來思考は精神反應及態度であり、従つて思考の要素は反動的性質を帶び受動的ではないのである。』

以上感情と他の心的要素及諸作用との關係につき、ミュラー・フライエンフェルス氏の見た所を總括すれば次の如くなる。即感情は現實的ではなく

抽象的ではあるが、明かに感覺と區別せらるゝ心的要素である。而して感覺とは共同して現はるゝのみならず、他の諸心的作用にも實際には感情要素を缺くことが出来ぬ。而かも感覺感情は元根本的にして分化せざる一般意識の分化であるといふ

にある。然らば所謂一般意識とは何ぞ、及其と感情との關係如何、之に對する氏の所説を次に述べやう。

三

感情の概念は然らば如何にして決定すべきか、之に關しては氏は最初にも述べたる如く、發生學の見解を助にとり來つて居る。氏は先づ次の如き假定を立て、居る。即第一には未だ分化せざる心的根本現象は、分化と共に消滅せざるのみならず更に發達するのは、恰度劣等動物も高等動物と共に發展すると同じい。第二には吾人が充分分化して居ると云つて居る心的現象も、一般的根元に關係

を有して居るといふことである。斯の如くして氏は次の如く説いて居る。

『失づ所謂未だ分化せざる即感覺にあらざ感情にあらざ又意志にもあらざる意識現象をあぐれば、所謂「有機感覺」所は「有機感情」是である。例へば營養系統から來る飢渴又は飽滿の意識等、又不快の意識例へば嘔吐の意識等も之に屬する。斯の如き状態の意識については、種々の見解がある。例へばエッピングハウスは之を感覺なりとし、他の學者は之を感情として居るが、實際意志的性質を帶びしめて居る。勿論斯の如き經驗は感覺とも感情とも又は努力とも云へる。然らば何れが正しいのであるか』之に對し氏は何れも一面の眞はあるが、又何れも全く眞とは云へぬ。即飢渴及他の凡の有機感覺は未だ感覺感情意志等に分化せざる意識經驗であると云つて居る。

斯の如くして氏は感覺の概念をば感官感覺のみ

に用ゐ、有機感覺とか感情とかは、之を有機意識（有機意識）と云つた方がよいと云つて居る。而して所謂感覺は之を客觀意識（客觀意識）と名けた。曰く『あらゆる意識現象は共通のものであるが、何等かの區別は存する。元來分類は如何なるものたるを問はず、實際的價值より行はれる。何となれば凡ゆる分類は其根柢に於て目的的であるからである。そこで吾人が感覺或は感情を分つのは、意識の客觀的及主觀的要素を分つことが出來るといふことに基くのである。而して其際客觀と主觀との限界として吾人の身體の外皮をとるのである。吾人が見、聞き、嗅ぎ、味い、觸るゝ場各には、凡て吾人自身の外に存する或客觀の意識であつて、こは飢渴又は飽滿の際有しない所のものである。即吾人は此「客觀意識」を以て感覺或は感覺の確實なる表徴と見ることが出来る。之によりて吾人は感情の消極的定義を得るのであるが、即感情には此「客觀意識」を缺き感覺と明かに區別せらるるといふことになる。其故に感覺を感覺に限るときは、明かに之を感情と區別することが出来る。併し「有機感覺」の方から見れば何うであるか。之に對する答は、已に述べたる所により明かである。即吾人は「有機意識」なるものを以て未だ分化せざる「全體意識」と考へ、感覺は其客觀的方面、局所化の發達であり、感情は其主觀的方面、價值化、特徴化の發達と見るにある。

なほ又茲に注意すべきことは、感覺の「客觀的意識」は新しいものではなく、已に原始的「有機意識」に準備されて居つたのである。何となれば「有機意識」は器官に結付いた意識であるが、器官中に現るゝ意識ではないからである。飢餓又は性的興奮は其に該當する器官の意識として經驗されなく、其以外のものに關係して居る。「奇麗」とか「面

白い」とかいふ感情も何かに關係せしめられて居る。是等の經驗には皆常に或關係が存する。が此關係はよく誤解されるやうに、直觀的觀念を内容として有するのではなく、其關係の意識は感覺の際始めて一定の外部に局所化さるゝ客觀的性質をとるに至るのである。而して此一定の客觀化は、感情の不定なる關係の意識の特殊の形に過ぎぬ。』

更に氏は感情を以て感覺と共に獨立なる心的本質となし、感情を以て單なる感覺の屬性と見做す見解に反對をなして居る。即曰く『學者は好んで「情調」の語を用ゐる。勿論如何なる精神要素も獨立の存在を有せず、只抽象の結果に過ぎぬが、感情は割合に分離して存し、感覺又は觀念の附屬でないことは明かである。而して是は殊に情緒の場合に著しい。即此場合には情緒が原初的のもので、客觀的内容は二次的になる。例へば神經性心配の場合を考ふるに、何の爲に心配なのか病人は知らずにかゝる状態を呈することがある。尤も實際感情は或任意の對象に固着することもあるが、それは全く二次的のものに過ぎず、感情が原初的なに於て同じである。併しこは敢て病態に限らず、健全なる精神生活に於ても其例に乏しくない。例へば何か想出すときに一定の方向の感情が起り、何等の觀念の存しない場合の如きである。又感情の「放散」といふことは、そが獨立な本體と考へらるゝとき始めて可能である。何となれば一屬性が一物體から他物體に移るといふことは出来ないからである。感情が一對象から他對象に移るといふときは、已に其獨立を認めたものであるといはなければならぬ。

其故に感情は獨立なる心的本質としなければならぬ。併し斯見地をとるものも、其考は一致して居ない。感情を以て感覺となす假定は前にも述べたが、其代表者はエッピングハウスである。彼は但

し感情は常に感覺或は觀念に結付て居ると假定したが、其屬性であるとはしなかつた。此關係を明かにするために彼は感情は其に伴ふ感覺及觀念の根柢に存する同一原因の繼起現象或は附隨作用としたのである。此見解は單なる「屬性說」よりは眞理に近いが、餘りに感情を下に見たといふ點で

矢張誤をなして居る。農夫と畫家とが同じ地方を通過するとき、同一感覺が働いたとするも兩者は異つたものを知覺する。其際何れ程迄觀念と見るかは人により考が違ふが、感情が大なる影響があつたといふことは争はれない。而かも其感情は新しく出來たのではなく、永い以前已に存した所のものである。其故知覺の成立には感情が大なる役目を演ずる。されば少くとも感情が感覺の繼起現象であるといひ得るならば、又感覺が感情の繼起現象であるといふことも出来る。なほ又エツピン

し彼のとつた知的立脚地、從つて科學的又は實際的目的から云へば、勿論感情は附隨的であるが、例へば美的或は宗教的標準から見れば、感情は附隨作用ではなく主要の作用で、感覺は却つて手段たるに過ぎぬことになるのである。

終りに氏は感情の多様性を力説して居る。元來感情の性質に關しては、多くは快不快の二つにせられて居るが、其處に亦見解の違が生ずる。即ち者は凡の快凡の不快皆同様であるとし、他者は快從つて不快は無限に分化して居る状態の總名に過ぎぬとして居る。氏はそこで快不快以外の感情ありや否やの問題に入るに先ちて、凡の快凡の不快は同様なりやに就て考究して次の如く述べて居る。

『凡の快凡の不快は同様なりやに關しては、快不快のみを以て感情なりとする心理學なほ且之を

拒んで居る。例へばチーヘンの如きも、感情は非常に多様なことを假定して居る。曰く「冬暖爐の側にて暖覺の起す快の感情は、協音の聽覺裝飾の視覺が起す快の感情と全然別異である」と。然るに「チチナ」は之に反對して、良い正餐の喜は良い行動の喜と同一であると云つて居る。思ふに彼は論理的誤謬をなして居るやうに見える。即ち彼は共通の見地に包括される二つのことは、其點に於て同一でなければならぬと考へたのである。併し抽象的共通は實際的同一とは異つて居る。例へば吾人は暗赤色と暗青色とを「暗」といふ共通の見地から一所にするとは出來ぬ。更に又赤の暗色と青の暗色と同一であるとも云へぬ。感情の場合も同一で「チチナ」の考へた如き抽象的に同じ快は實際には存せず、只多くの異なる快の感情があるのみである。あらゆる異なる個人から抽象した「標型人」のなきが如く、要素としての快其者は存在しない。即ち快の感情は無限に多様で、只抽象的に言表はされた概念に過ぎない。吾人は其故に快不快は其各に於て同じか異なるかの問題に對しては、無限に多様であると答ふるのである。』

氏は更に進んで快不快は、決して唯一の感情の對立ではなく、それと共に他の多くの對立があることを主張して居る。即氏は感情の多様性を假定し、快不快を以て特に重要な方向の總名と見たのである。曰く『或快は他の快に唯に感覺要素によりてのみならず性質に於て異つて居るが、あらゆる快の感情は快の一般の範疇の下に包括せしむることが出来る(従つて亦不快も)。恰度あらゆる色を「明」と「暗」とに分ち得ると同じい。然るに已に述べたやうに、個々の色の暗色と明色とは等しくない、寧ろその區別は實際には存せず、抽象の結果に過ぎぬ。加之「暗」其者もなく「明」其者もない。抽象と實際とは決して混同してはならぬ。感

情に於ても同様で、快不快の範疇に分たるゝ無数の感情は存するが、實際には快不快其者は存せず常に特殊の快不快の感情存するのみである。更に又實際には暗青色其者も存せず、只莖、「リンドウ」乃至或物の暗青色が存するのみである。即ちあらゆる色は色其物として存せず、それより抽象したる「暗」青」といふ性質の外に、なほ他の性質を有する。感情に於ても同様で、實際には快不快要素以外の感情要素をも具する無数の「趣」の異が存する。』

氏はなほ此特殊感情説を高調して次の如く云つて居る。『吾人が友人に對する特殊の感情を見るに到る處同じくない。或友人甲と或友人乙に對し考ふるとき、其記憶心象に結付く感情は異つて居る。又一つの微薔の觀念に結付く快の感情は、モツァルトの曲の觀念が喚起する快の感情と根本的に異つて居る。感情の趣の違の如何に微少なるも

のなるかは、ゲーテの色彩の感情に及ぼす影響に關する觀察がよく之を示して居るが、酒の味を表はす言表の豊富なるにもわかる。元來味覺は感覺の性質と感情とを分つことの困難なる範圍で、最早有機意識に近いものである。而かも極めて豊富なる趣の違が區別せられて居るのは、全く其客觀的性質よりは寧ろ反應の方面から立てられて居るものと云はなければならぬ。斯の如くして氏は『吾人はヴントと共に簡單感情の性質上の多様性は無限に大であるといふことを假定する』と斷言して居る。

以上吾人はミユラー・フライエンフェルス氏の所論の概要を述べたのであるが、個々の點に於て極めて有益なる言説をなして居るに拘はらず、肯綮を失して居る點も亦少からずあるやうである。吾人は今其細點に關して之を論評するの餘裕を有し

ないが、氏の所説には明かに二つの大なる思想の混雜が存するやうである。卽ち有機意識なるものを假定すとして、之と感情との關係の不明なる其一で、感情の根本方向は快不快なりや將た多方向なりや明かならざる其二である。氏は一面に於て有機意識の分化として感覺感情生起せりと云ひながら、他面には感情及有機感覺は有機意識なりと云つて居る。然らば感情は未だ分化せざる有機意識なるか、將た分化せる後の状態なりや不明であるといはなければならぬ。更に又感情は多種多様無限の變化あり一方向に攝すべからずと云ふを見れば、多方向説なるが如く見える。然るに快不快は恰かも明暗の如く、而してあらゆる色は皆明暗に歸せしめ得る如く、快不快はあらゆる感情の重要な方向の總名と見做すことが出來るとしたるを見れば、根本に於て一方向説なる如くにも見えなでもない。氏の所説にはかゝる思想の混雜あるにも拘はらず、兎も角感情の發生學的説明を高調し、之を有機意識とふ概念より導出せる見解は、興味ある一學説として之を紹介する價值ありと信じ、茲に其大意を傳へたる次第である。

東方亞細亞の教育に關する一

小 西 重 直

昨年は夏の末より秋の初にかけて東方露領、滿洲、支那本土及朝鮮等に亘り海路約千五百哩、陸路四千哩以上の旅行を試み、今年の四月は臺灣へも渡つて見た。本誌の委員より夏の讀物として此